

近松秋江私論

——初期の小説を中心に——

島 田 昭 男

「別れたる妻に送る手紙」(『早稲田文学』明43・4~7)の妻は、周知のごとく秋江の内妻大貫ですがモデルとされているが、この小説以前にも「八月の末」(『早稲田文学』明41・11)、「お金さん」(『文章世界』明42・2・15)、「一人娘」(『趣味』明42・3)、「雪の日」(『趣味』明43・3)などにも扱い方、描き方は異なるが、さすがモデルとして登場している。このうち「雪の日」を除く三篇は、まずの家出(明治四十二年八月末)前の小説である。それゆえ当然のことながら「雪の日」とは同じモデルであつても、その対し方には相違が見られる。この時期の秋江には前夫への嫉妬を別とすれば、まずへの猜疑、念慮、悔恨といった心情の揺れはそれほど強くは認められない。むしろ所帯を持つてから六年近く経っている二人の間に静いのなかつたわけはなく、戸籍や経済上の問題にからんでまずは何度か実家に戻りはしているが、しかしまずについて秋江はまだまだ安心してゐる状態にあった。多少のことに眼をつむれば己れの懷うちに抱え込める余裕はあり、事実またそのようにまずを取り扱おうとしている。秋江がま

すに対してもかなり身勝手な行動を取りえたのもそこからきている。まずへの安心感である。このことは小説のうえにも如実に表れている。

例えば「八月の末」であるが、これは題名通り明治四十一年八月末、三日間の話になっている。主人公の彼(原文では「彼れ」が「故郷の兄から五六百円の錢を融通して」もらい、妻君に雜貨商を開かせたのは一年ほど前である(『近松秋江年譜』⁽¹⁾の明治四十年の項には、「六月、牛込区赤城元町七番地に小間物店を出し、まずが経営にあたるとある。」とある)。

妻君に雜貨商を開かせた理由は、商売を「遣らして、家内に不自由さへなくして置けば、自分は衆に思ふ存分な働きが出来るだらう」と考えてのことであつたが、期待通りに事は運ばず、商売はじり貧状態に陥り、わずかな売上金まで使い込んでしまふようになる。彼のほうの仕事もなかなか涉らない。もともと「身体が強くないのが手伝ふ妙な性格から如何な仕事でも斯何勤めでも一年と倦かずに続いたこと」のない彼にとって、「其の内何か書か

うといふやうな期間のない仕事」ができようはずがない。せっかくの翻訳の仕事も八、九ヶ月も経って完成しない。新聞社からの雑録料が多少入ってくる程度で、問屋の支払い、家賃、米代何れも滞ったままできている。そのうえ八月末期限の別の借金がある。

これはこの年の春、関係のできた女（卑しい女」と作中では呼ばれている）と切れる際に借りた金である。いったんは「勝手な道理を設けて性慾の満足を得やう」と関係を結んでみたが、「全性根を傾けて其れを楽しむ」ことができずに暫くすると倦いてしまう。しかし「女との仲を清潔」にしようとするには「相應の錢」が要る。それがどうにも都合つかぬので、「一月ばかり其の女を自家に入れて七月の半から八月の半まで暑い最中を三人銘々をこねて可い加減間を置いては時々噴火山の爆発したやうな喧嘩」を繰り返す（傍点原文）といった酷い暮らし方になる（この小説では触れられていないが、妻君つまりますます悪い病氣を移されるような始末になる）。妻君にとってこれほど侮辱された話はない。しかもそれを清算するための借金に苦しまねばならぬとは。彼の身勝手さもいいところである。

さすがの彼もその点は「自分でも憤つてゐる弱点」と承知しており、妻君の前では時折憚るやうな素振りを見せたりする。だが全面的に非を認めるといふのではなく、妻君から借金の話や身勝手な行動を批難されると語氣荒く応酬、怒った妻君が外へ出ていくやうな仕儀になると、それをよいことに出版社から強引に前借してかねてからの望みであつた避暑（湯河原）に出かけてしま

う。「新橋でまた懷中を考え／＼青い切符を買つた。暑い日に汚顔を見ながら穢しい臭をかぎ／＼狭い箱の中にゐるのは、此様な場合でも彼れには堪え難い思ひがする。それよりも自分で三等の運命を付することが苦痛なのだ。」（傍点引用者）と、乏しい金の中からあえて青切符を求める部分など滑稽にすぎる思い入れと言わざるをえないが、つまりはかかる行為をも含め己れひとりの思惑、願望に発した無理を終始押し通すことで、所帯を尋常ならざる状態に追い込んでいく。ここには破局につながる愛想尽かしまでは及ばぬだろうという妻君に対する安心感——見縊りと甘えとが明らか見てとれる。そしてまた作者秋江もまずに對して同様ではなかつたかと考えられるのである。そうでなければ、そもそもこうした類いの小説を臆面もなく書きはしなかつたであらう。怠惰な性情がゆえのうだつの上がらぬ暮らし振りもそうであるが、「卑しい女」を家に引き込んでの自墮落な暮らしを公にすることに、果たしてさすがどこまで耐えうることできたか疑問である。正宗白鳥は、「この女何ものであるか。長火鉢の前で、扱帯で立膝で、長煙管で煙草を吸つてゐる有様は、安女郎と見立てられさうな風情であつた。年増の、所帯汚れのしたおます夫人との相違が目立つが、夫人は一家の主婦としての權威を見せるためか、この寄食者を庇ふやうにして、殊更睦まじさうな素振りを見せてゐた。」（流浪の人）と書いているが、さすが白鳥の前で示した態度は「主婦としての權威」を取り膳うためもあつたらうが、他人の前で痴話喧嘩もできかねるというのが実際ではなかつたか。この後、白鳥は続けてますと女とが秋江をからかう話を紹

介しているが、そのからかいにしても秋江の甲斐性の無さや身勝手さに対する侮蔑、憤懣の表れであり、決して明るい戯事ではなかつたはずだ。ますとすればともかくこのような妻妾同居の暮らしは一日も早く清算して欲しく、またそんな暮らし振りをあえて公にし世間の眼に曝すことを好みはしなかつたであらう。恥の上塗りであり耐えられぬことであつた。秋江自身は己れの羞恥心を押え込みさえすれば済むことであるが、それをますに強いるためにますへの強い安心感があつて始めて可能であつた。

秋江は後に「八月の末」を評して、「素材に近く芸術品に違ひのは取も直さず（略）晶^{クリスタル}化^{クリスタライゼーション}が足りないから」であるとしている。素材の有する「価値^{ヴァリュー}」を「無用の混入物」から選別し、「想像乃至主観の熱」をもつて溶解、変化させていく方法を秋江は「素材を晶化する」と呼んでいるのだが、「八月の末」にはそれが不足していると言うのである。つまり「素材」への安易な持たれかかりを自省しているわけだが、しかし問題はかような「素材」が小説化するに値するかどうかであり、小説化するとすれば秋江自身はもちろんであるが、ますの位置づけ、扱い方が問題にならざるをえず、慎重な配慮と検討が必要であつたはずである。当然これは「素材の晶化」にかかわる問題である。その意味では秋江は杜撰すぎたものではあるまいか。ますへの配慮はほとんどなされていまいと言つてよい。結局は自分の思い通りになるであらうといふますに対する安心感——見縫りと甘えとが強く働いてのことであらうが、断わるまでもなく、それは大きな代償をもたらずにはおかなかつた。ますが味わたたに違ひない恥辱感と無念

さとを、三年半後には逆にますから無惨なまでに味わされることになる。

ところでこういふますへの対し方は、かたちは相違するが「お金さん」、「一人娘」にも認められる。

「お金さん」は、前作「八月の末」の翌年にあたる四十二年一月、家に訪ねて来たお金さんの身の上話を主人公の私が妻君（作中では「家内」という呼び方をしているが）から聞く話である。

お金さんは妻君の従姉妹の子であり年齢四十三歳。二十歳の時能登の七尾から上京（ますの母屋すは石川県鳳至郡の出身である）、腕を活かして仕立屋の仕事などにつくが、男運に恵まれない女で上京前すでに一度結婚に失敗している。東京に来てからも鉄道とか工場の月給取り、番頭、憲兵などと世帯を持つが、他に女が出来たり死なれたりして何れも永くは続かず、最後は片眼の悪い男に半ば騙されるようにして結婚させられる。しかも先夫の死亡一時金を注ぎ込んで、男と開いた小間物の卸屋も思わしくなく、川崎へ移つて羽織紐の商売を始めるが、男の病氣（痛風）のこともあつて立ち行かなくなり、親子四人して木賃宿に暮らすまでになる。主人公はそうしたお金さんの不幸な身の上話を妻君から一部始終聞くわけだが、その妻君はここでは細かな事柄にまでに気づく世話好きな女として描かれているだけで、それ以上には筆は及んでいない。

しかし「八月の末」もそうであつたが、男運の悪さという点では妻君もお金さんもそれほど差はなかつたと言えよう。妻君のモデルがますにはかならずとすれば、ますは秋江と所帯を持つ前

にすでに結婚に失敗しており、また秋江との暮らしも「八月の末」などからも窺えるように悲惨である。所帯を持ってから五年は疾うに過ぎているのに籍は入れてもらえず、経済的には逼塞状態が続いている。そのうえ前述の「卑しい女」との関係も割り込んできている。これらの事実を秋江はどのように考えていたのであろうか。言うまでもなく、これらはすべてお金さんの不幸な身の上話を語って聞かせる妻君にもかかわる問題ではなかったか。

お金さんに同情的であり、姉夫婦などともに細かな世話までみようとする妻君に自身の不運、不幸を想う気持ちはあつたはずであり、それがお金さんの面倒をいっそう親身になってみることにあつている。つまり不幸な女より不幸な女への心尽しであるが、そこでのわが身を振り返つての辛く惨めな想いは描かれていない。そこまで秋江の眼は届いていないのである。妻君の身の上も所詮はお金さんのそれと五十歩百歩であり、場合によってそれよりさらに悪化するかも知れぬという認識、自覚はない。このことは主人公をして単なる身の上話の聞き手——傍観者に限定し、筆者秋江に何らの痛みも感じさせない結果となつている。小説そのものに即して言えば、語り手である妻君の閑歴、境遇、心情を全的に捉えることで、語り——身の上話の内容をより多角的に表現しドラマ化する試みを最初から放棄してしまつていることを物語つていよう。後日、秋江は「内田魯庵氏が私に人間といふものは誰れでも筋を持つてゐる。と言はれた。分り切つたことのやうであるが、本當にさうだ。此の折角の筋を、だいなしにしないで面白く読者に見せるにはゾラマチャルに取扱ふにある。殊更ら無い

ことを有るやうにするのではない。同じ有ることをば扱ひ方によつて気もないものにしてふとのしないとの相違である。」（「思つたまゝ」(三)、傍点原文）と語っているが、この時にはまだそこまで進み出ておらず、似たことは「一人娘」においても感じさせられる。

「一人娘」は、秋江がまずと最初に住んだ小石川区小日向台町から音羽のますの実家に移つた頃、つまり三十七年秋の話として描かれてゐる。一人娘とは二軒長屋の隣に母親と一緒に住む五十前後の女（「御新造」と主人公たちは呼んでゐる）を指している。この女の場合、半分は本人の責任でもあるが、やはり男運には恵まれていない。牛込榎町の相当な屋敷の娘であり、婿を二人取つたが一人は病死、一人は道楽者でうまいかず、その後縁戚を見込まれ大きな質屋の後妻に収まるが、夫の病氣中に入入りの差配と関係ができ、離縁される。暫くして再び結婚することになるが、差配との関係が続いているのが知れて離縁、つまりは差配に面倒を見てもらつての長屋暮らしとなる。したがってその暮らしは明るくはない。差配を連れ込むために下宿人は長くは居つかず、出費を切りつめんがため娘は他家の物にまで手を出すようになり、母親はこんなにしてゐるよりいっそ死にたいと愚痴をこぼす毎日となる。最初の蹟きが次々と不運を呼び、次第に窮迫していく女所帯の暗く不幸な有様が、妻君（作中では「妻」といふ呼び方になつてゐる）を通して語られてゐるのだが、「お金さん」と同じくそれを語って聞かせる妻君の持つてゐるであらう不幸に重ね合わされてはいない。主人公の私は他人の不幸話にただ相槌

を打つだけの傍観者であるにすぎない。己れの妻君を隣家の娘の不幸に重ね合わせてみることで痛苦は描かれていない。

「趣味」(明42・4)の「先月の小説」欄では、この小説を「非常に苦心した作らしいが、其の苦心が思ふ程顯はれなかったのも事実である。今少し思ひ切つて書き流して了つた方が却つて作者の思ふところがよく顯はれるであらうと思ふ。癡つては思案に能はずだ。」(無署名)と寸評しているが、この評言とは逆に、むしろ單なる身の上話、世間話として「書き流して了」わぬほうがよかつたであらう。一人娘の身の上、暮らしがその不運、不幸さに応じて突きつけてくる酷く陰鬱な問題を、妻君及び主人公の實の生活に即して描く必要があつた。決して他人事ではなかつたはずである。もっとも秋江自身全く無自覚であつたわけではなく、「一人娘」について「西本君(趣味)編輯者——引用者)のは、書かうと企てゝゐた五六十枚のは中止して、唯責めふさぎに、嘗て見聞したことを書き流して送つた」(傍点原文)と記す一方、「小説が何処までも、人間界に起れる事実を報告するものでありとすれば、普通の読者にも、それが十分会得出来ねばならぬ。何人にも会得出来るやうに、人間宛らに書けばこそ、其処に、芸術品にも生命の光が点ぜられるのである。生命の光ある人間は、何人にも会得せねばならぬ理由である。」(「発見家か創作家(上)」と書いてゐる。何人にも「会得出来る」よう「人間宛ら」に描くことを第一とする(そのためには「想像力」が必要であることを「発明家か創作家(下)」では説いてゐる)小説理念からすれば、「書き流」すことが持つ表現上の弱点は問われて然るべきであつた。

た。安易に流れてならぬのは当然で、同じ文中で「小説を作るといふことは、私に取ては、何等の寸分の遊戲衝動ではありません。苦痛です。」と記さざるをえなかつたゆえんでもある。

そこで「雪の日」であるが、「一人娘」から一年後に発表された小説で、冒頭に述べたごとくまずの家出を中に挟んでいる。秋江の生涯にとってこの一年間は波乱に富み、負ばかり積み重なつていつた時期であるが、小説家秋江を生み出すうえで大きな意味を持っている。今、それを年譜ふうにとめてみると、

〈明治四十二年〉

三十三歳

三月、牛込区赤城元町七番地で経営していた小間物店を閉じ、小石川区関口台町に転居する。

白鳥の言う秋江にとって「人生悲劇の因縁」となつた故郷岡山の学生を下宿させる。

六月、牛込区喜久井町二十番地に転居する。学生も一緒に居た。

七月、十八日より箱根堂ヶ島に滞在する。

八月、一時帰京する。月末、ます家を出、秋江の前から姿を隠す。

十一月、蠣殻町の女お君(白鳥は「おきみ」と書いてゐる。本名太田きみ子)と親しくなる。暫くして病氣を移される。

十二月、小石川区関口駒井町加藤方に転居する。お君、白鳥に近づく。

〈明治四十三年〉

三十四歳

一月、下旬、病氣のため顔に吹出物が出る。

二月、二十日、かつて住んでいた赤城元町の家類焼。下旬、病氣いっそう酷くなる。

三月、初旬、お君姿を消す。白鳥、部屋代を出し「浅草田原町の知り合ひの家」の二階にお君を住まわす。

『文壇無駄話』を光華書房より刊行。

先の「八月の末」などに比較してみても状況の悪化は際立っている。まさに八方塞りとも言うはかはないのだが、そうした中で秋江が「雪の日」を書こうとしたことの意味はなんであったのか。

「お金さん」、「一人娘」がそれぞれ妻君に他人の身の上話を語らせているのに対し、「雪の日」で妻君自身のそれ——先夫を中心とする男たちのことを語らせている。妻君と書いたが「雪の日」では「女」となっている（これまでの「妻君」、「家内」、「妻」といった呼び方と変っているのは注目してよいだろう。秋江の現実から言えば、夫と妻という関係（内縁にすぎなかった）は解消せざるをえなくなっている。以下「女」という呼び方にする）。

しかもここでは、主人公の私の問いかけに応じるかたちで話は進行している。前二作がいわば受動的な聞き手であったのに比べ、「雪の日」は能動的な聞き手になっており、主人公のリードによって女自身の男にまつわる身の上話は展開されていく。つまり主人公の私が、先夫を始めとする過去の女の世界にいた男たちのことを聞き質しながら、改めて女との関係——愛の在りようを

問おうと形式をとっている。これは行方知れずになっているますとの関係の再確認を秋江が意図していたことを意味してもいようが、さらに言えばそうした意図を主人公の私を通して具体的に形象化していくことで、ますとの関係修復を願っていたとも考えられる。その点で「雪の日」は秋江のますに対する一種の口説きであったと言える。

したがって「雪の日」での主人公の女への対し方は、許容と労わりが前提になっている。例えば、四年に亘る女との暮らしの中での「種々雑多な悲しい思ひ、味気ない思ひ」も、「つまり主として私（主人公——引用者）の性格、境遇から由来」する、と己れ自身に問題があったことを認めさせると共に、十六、七時分、蛙を火箸で打ったのを一晚中苦に病んだという女の話に「落着いた興味」を感じ、「そんな女の性質が気に入った」り、或いは前には女が「淡い、無邪気な恋をしたこともあったかと思った」が、今は「嫉ましいとは想へなかった」とか「情には脆いが、堅い確乎した気質だといふことを信じてゐる。」などといった具合に、女への思い遣りと信頼を語らしめる。女が語るかつての男たちのことについて、別段深く問い詰めるようとはしないし、女の非についても語ろうとはしない。

女が主人公に語って聞かせる男は四人である。十年ほど前、当時米屋をしていた女の家に問屋から廻ってくる二十ばかりの手代、二十歳時分のこと、風呂帰りを待ち伏せ声をかけてきた若い男、最初の連合即ち先夫、それに先夫ともども知り合ひの男であるが、もちろん話は先夫が中心になっている。米問屋の手代は女

にとつて初恋の男だが、ただ好ましさを「腹の中で思つてゐた」にすぎず、風呂帰りを待ち伏せていた若い男、先夫の留守に上り込んで女を口説こうとした知り合いの男などは、何れも行きずりの男でしかなかった。

だが中心人物の先夫の場合でも、そのかつての暮らしは具体的には語られず、また問い詰められもしない。先夫のことを以前は激しく嫉妬し、女をいじめもした主人公のことが語られ（決して充分ではないが）、それに私—主人公が対応するという仕組みになっている。主人公の女に対する心情、態度——愛の在りようがつまりは主として語られていくことになるのだが、これはこの小説を読むであらうますのことを充分予想したためであらう。ますへの一種の口説きにはかならなかった。

主人公の私は、かつて先夫のことで「嫉妬の焰に全身を燃し」絶えず喧嘩を繰り返してきた。「反感と熱愛と互に相表裏」して別れ話も一度ならずあり、女を横抱きに泣いたこともあった。が、最近では先夫のことを「思い沈んで嫉くやうなこと」はない。先夫の話やそれに関する女の「心持」を聞いても、前のようにには激しく心は動きはしない。女のほうにしても同様、「私はもう大した怒りはありません。一生何うか斯うかその日に困らぬやうになりさへすれば好い。貴下も本当に、早く、もう少し気楽にならなけりやいけません。仕事に精出して下さいよ。」などと、主人公との暮らしの維持に心を傾ける。この限りでは二人の所帯は平静を保ち破綻の徴候は認められない。

しかしそれが果して本当の愛によつてであるかどうか、主人公

の私は問い返えせずにはおられない。女が「あの時分のやうに、もう一遍あなたの泣くのが見たい。」（傍点原文）と言つたのに対し、主人公は「最早、何もそんなに強ひて泣く必要がなくなつたらぢやないか。」とひとまず答えるが、心中つぎのような感慨を持つ。

「果して女に対して熱愛が薄くなつたがために、二人の此れから先の關係に就いて泣けさうになくなつたのか、それとも歳月を経てゐる間に知らず識らず二人の仲がもう何うしても離すことの出来ない、例へばラムプとか飯茶碗とか言つたやうな日常必須の所帯道具のやうに馴れつこになつて了つたのかも知れぬ。私はそれが何れとも分らなかつた。」

またこの小説末尾近くでも、女の話聞き終えた感慨として、「私は最早以前（よ）のやうに胸のわく／＼することはなかつた。それは何ういふ理由（ゆゑ）であらう？ 愛が薄くなつたのであらうか。それとも愛の爲に其様なやくざな思ひが何時しか二人の仲に融けて流れて了つたのであらうか？ 分らない。」（傍点原文）と語らせている。

もちろん主人公からすれば「愛が薄くなつた」とは言いたくない。愛の恒常化（こうじょうか）がもたらす眼に見えぬ絆の強さを確認したかつたに違ひないのだから、作者秋江にとってはさすが自分の前から姿を隠し、行方知れずになつてゐる現実を眼前にして、そう言い切らせることはできなかった。「分らない。」と答えさせるよりほかに説明のしようはなかつた。

ますのことがかなり強く意識され、それが主人公の言動を規制

してきている。そしてこれは主人公をして「私生涯」の告白を拒否せしめる有名な一節についても言えよう。即ち「自己の私生涯を衆人環視の前に暴露して、それで飯を食ふことが何して堪えられよう！／＼私は、まだ此の口を糊するが為に貴重な自己を売り物にせねばならぬまでに浅間しく成り果てたとは、自分では信じられない。」とし、女と一緒に前後から現在に到るまでの先夫への嫉妬を始めとする様々な「思ひ」の実態を語ろうとはしない。「創夷多き胸」、「微かに指先を触れただけでも飛び上がるやうに痛まし」くもある「焼け爛れた感情」の具体相は、ついに語られることなく終わってしまう。主人公の心情は女のほうからも照らし出されるが、本人が口を閉ざしている以上肝心の奥底の部分まで光は行き届かない。このことは二人の間の愛の在りようについて、主人公が不明確な答えしか出来ずにいるもう一つの理由となっている。主人公の「創夷多き胸」、「焼け爛れた感情」の実態如何は、当然女への愛の在りようを規制せざるをえないが、それが明らかにされないとするれば、「分らない。」と答えさせるほかにいたしかたなかったであろう。愛は基底部から捉えられておらず、主人公の語る愛は稀薄さを伴わざるをえない。微温的な処置に終始することを主人公は強いられていると言える。

だが秋江にとっては、それはそれでよかったのではなかったか。赤裸々な心情告白が「雪の日」の世界を変質させるのは明白である。主人公の先夫への嫉妬をさらに剔抉することは、猜疑心と憎悪とを一段と増幅させずにはおかず、それは女に対する不満、愚痴言を表面化することにもなりかねない。

「勿論節操は正しいのですが唯、処女でないのです私にはどうしても十分の恋の熱情を傾倒することは出来ないのです。私は自分では、非常に恋の情を以て居ると意識しながら、先が処女でないために十分に自己の恋の情を出しかねる。(略)随分イギリスチックだとは知りながら、その点で私は婦人をいじめました。今でもいちめて居ます。」(傍点原文)「恋を得ながらの失恋」(註)「雪の日」より一年半ほど前の文章である。

これと同様なことは後に、ますをモデルとした「旧痕」(中央公論「大15・10」)でも、「その女の前半生がひどく、彼女の肉体に対する悩みの種であった。女に対する愛執が募ればつるほど一層その悩みが増した。」「彼女が処女でないといふことが、私にとりて償ふべからざる不幸を感じせしめるのであった。」と書いているが、さらにそれに加えて「その女は、大して価値のある婦人ではなかった。」「彼女が、私の審美的要素にも叶つてゐないことも不満の一つであつた。」などとも書いている。

これらに類する不満、愚痴言は「雪の日」では押さえられている。(執筆時、すでに関係のあった蠣殻町の女お君のことも一言も語られてはいない。)もし主人公がすべてを口に出したら様相は一変したであろう。女への愛についての問いかけにしても、その意味、内容は違つてこようし、答えも尋常ではなくなつてこよう。秋江の当初の意図通りに「雪の日」を完結させる(つまりますとの関係修復を可能にする)ためには、主人公の赤裸々な心情告白は避けられねばならなかったのである。女への愛の在りようが「分らない。」と答えさせることで、秋江は自身はもちろんま

すのためにも救われ、余地を残したと言えよう。微温的な処置でよかったのである。

後年、秋江は「飯にした女難」⁽¹²⁾という文章の中で、「その女と同棲してゐた七八年間といふものは、自分の生業の基礎の最も極まらない時代であつた。(略)小説家になるなどいふことは実生活の上からいへば、非常な冒険であつた。(略)これは、何も泣きごとをいふ訳ではないが、共に貧苦を嘗めた女のことはいつまで経つても忘られない。その女を女難といふのは敢えて当らない。むしろ先方にとつて、男難⁽¹³⁾といつた方が最もよく当つてゐるかも知れぬ。といつても私の方が色魔になつて、女から金を捲き上げたといふところは少しもない。つまり共に愛執に苦悩し、共に空しく年を老いたといふことになつた。実に凡愚の限りを尽したのであつた。」(圈点原文)とますとの暮らしを回顧している。

確かに秋江の言うごとくますにとつては男難であつた。下宿させた学生と関係ができ家出したのも、元はと言えば秋江の身勝手さ、甲斐性の無さが起因しており、結局はます自身の言葉通り「一生下らなく暮す」⁽¹³⁾ことになる。実際に「凡愚の限りを尽」さざるをえなかつたのは、秋江よりもますにはかならなかつた。

そうしたますに、「雪の日」の秋江の口説きがどこまで通じたかは疑問であらう。ますからすれば所詮虫の良い繰り言にすぎなかつたのではあるまいか。蠣殻町の女との噂も耳にしていたであらうが、学生との関係があれば尚さらであり、秋江から身を引き離すのに精一杯なのが実状であつたらう。「別れたる妻に送る手紙」で、まさに「創痍多き胸」のうちにを剥き出しに語らざるを

えなくなつた理由も、一つには秋江がその辺を感知してのことではなかつたか。

(一九八二・七)

注(1) 中島国彦編(日本近代文学大系『岩野泡鳴・近松秋江・

正宗白鳥集』昭49・1、角川書店)

(2) 「文芸」(昭25・4・6)

(3) 「印象批評の根拠」(「趣味」明42・6)

(4) 「読売新聞」(明43・6・11)

(5) 「読売新聞」(明42・3・13)

(6) 「読売新聞」(明42・3・14) 例えればつぎのような一節がある。

「科学思想の発達は、文学から、想像——従来の意味の——を全然奪ひ去つて唯実際に生起する事実を発見し、それを具象的に描出するのみを以て芸術家の任務たらしめるであらうか。此の際の想像力の必要は、生起した事実を報告的に記録せずして、具象的、芸術的に描く場合の狭小なる部分に止まるであらうか。乍^{しなから}併此の場合のイマジネーションが即て小説家の至宝である。」

(7) 「流浪の人」(前出) 尚、夏目漱石の「日記」(明

44・6・7)には、「徳田秋江が来て姦通事件の話をする。

小説の様に面白かつた。」とあり、学生の名を「岡田」と

している。「漱石全集」13巻、昭41・11、岩波書店)

(9) 「流浪の人」(前出)。尚、「動搖」(「中央公論」明43・

4)にも同様な叙述が見られる。

(10) 「小石川の家」(「早稲田文学」大9・4、「無明」(「中

央公論」昭2・1)などにも、靜いの末「帰つて、一生を

つまらなく暮すんだ。」「これから自家に帰つて、一生下

らなく暮すんだ。」などと言つて、女(妻)が荷物をまと

めて家を出る場面が描かれている。

(11) 「文章世界」(明41・7・15)

(12) 「新潮」(昭2・7)

「わが女難史」というタイトルで、ほかに新居格が「幻影現象」、宮地嘉六が「掌の三つの箱」と題し執筆している。

(13) 注(10) 参照。

「付記」この小論は、「文学年誌」(文学批評の会編)に連載している「近松秋江私論」の続篇で、「近松秋江私論(六)——『別れたる妻に送る手紙』論のための覚え書(三)——」に当る。

新刊紹介

紅野敏郎編

『リトルマガジンを読む』

文芸同人誌が近代文学史上空前の簇生状況を見せた大正末から昭和にかけての時期は、各種の雑誌の競いあった、いわば横の時代であるという認識(以下引用は紅野まえがきから)から、同書は対象を一つの雑誌に限定せず、「主潮」「山嵐」「青空」「驢馬」「文科」の五誌をとりあげ、尾崎一雄・村田春海・小宮山明敏・岡沢秀虎・富永太郎・永井竜男・木村庄三郎・梶井基次郎・外村繁・三好達治・窪川鶴次郎・堀辰雄・牧野信一・田畑修一郎・坂口安吾らを論じている。二三の例外もあるが論文の

多くは、へ独自の大成を果した人もあれば、志なかばにして夭折した人も多いし、才能を伸ばしきれなかった人もいる。同人誌時代という揺籃期において彼らが自己の資質を確認、一個の文学者として自らの進むべき方向を見定めて行く過程を追究している。まさにそこにこそリトルマガジンを読む醍醐味があるといつてよからう。また、内容もさることながら、表紙から広告に至るまで時代の匂いが色濃く漂う。これら同人誌の総目次が広告類まで記載しながら簡便なかたちで巻末に付されていることも読者にはありがたい配慮である。

(昭57・5 名著刊行会 A5判 三六〇頁 二五〇〇円) [田沢基久]

お願い

「国文学研究」では、会員諸氏の新刊書の紹介につとめております。広告等で、できるだけ刊行の状況を把握してはおりますが、まだ遺漏があらうかと存じます。お気づきの新刊書がございましたら、編集委員会まで御一報願います。

また、国文学研究室には、各大学、個人より寄贈された図書、雑誌が所蔵され、大学院生、学部学生の閲覧に供しています。会員の皆様の著書が刊行されました時には、是非一部御寄贈いただけますようお願い申し上げます。

(送り先)

〒一六二 新宿区戸山一―二四―一
早稲田大学文学部国文学研究室